

アフリカとの関係再構築に向けて

In the process of rebuilding my relationship with Africa

マリーク AYSA 文恵／Maleek Aysa Fumie

はじめまして。24歳のガーナ人ミックスの娘がいる
AYSA 文恵と申します。現在、アフリカと仲直り中です。

今から20年ほど前、私はアフリカ人と結婚したことにより、自分の身に降りかかるさまざまな苦しい出来事を処理しきれずにいました。自分で決めた人生でしたが、その選択を後悔し、アフリカを嫌いになりました。そして、長い間ずっとアフリカに背を向けて生きてきました。

アメリカからの帰国子女だった私は、「英語うまいねー！ やっぱアメリカに住んでたからだよ。パートナーも外国人なんだ。かっこいい！ どこの出身？ え？ アフリカ？ アメリカに住んでたのに、アフリカの人と一緒にあったの？ もったいない……」当時、何度こんな言葉を投げかけられたかわかりません。パートナーがアフリカ人と知った途端、あからさまに見下した態度を取られたことも数え切れないほどありました。悲しいことですが、2025年になった今もまだ、同じようなことは起こっています。

困難な家探し

結婚するにあたり、さまざまな困難が待ち受けていましたが、中でも厄介だったのが家探しでした。大げさではなく、100軒近くの不動産屋を回りました。現在よりも一層、差別や偏見がひどく、「アフリカ人だから」、「黒人だから」という理由だけで断られる日々が続きました。夫と結婚して初めて暮らした家は、アフリカンOK、そして親族ではない保証人OKのボロボロのアパートでした。当時の私たちには選択の余地はなかったのです。

妊娠、出産、孤独の中の育児

私の家族全員、結婚に反対でした。娘を妊娠したことがわかった時も、彼らは産むことに大反対でした。家族に反対されたまま、結婚そして出産を強行突破することになりました。妊娠の検査で訪れた病院で、子宮頸部の初期ガンになる一歩手前という状態が判明し、妊娠5カ月の時にレーザー蒸散手術を受けました。

その時も、そして帝王切開で娘が生まれた時も、私たち夫婦は、たった2人きりでした。同室の新米ママたちの両親や家族が賑やかにお見舞いにくる中で、私は夫が面会に来ない間は、ずっと1人きりでした。産後の、ただでさえ情緒不安定になっている中で、家族の誰からも祝福されない現実はとても寂しく、そして辛いものでした。

頼れる親族もおらず、まだ痛む帝王切開の傷を抱えて、退院したその日からどうの育児の始まりです。夫は毎日夜遅くまで働き、ほとんどの時間、私は娘と2人きりでした。悲しいことに、その頃の記憶が私にはほとんどありません。今になってみれば、一瞬しかない赤ちゃん時代をもっと慈しみ、大切に噛み締めて過ごせていたらよかったと思いますが、当時の私にはとうてい無理な話でした。

職務質問

娘が保育園の頃、夫はよく警察官に止められていました。ひどい時は、朝、娘を自転車の後ろに乗せて保育園へと急いでいる時に、自宅の最寄り駅にある交番の警察官に呼び止められ、職務質問をされたり。はたまた仕事後の帰宅を急いでいる最中、会社の最寄り駅近くで警察官に呼び止められ、「アフリカ人」と伝えた途端に彼らの態度が一変し、パスポートを持ち合わせていなかった彼は、そのまま警察署に連行されたり。そんなことが、短い期間に何度も起こりました。警察官と一緒に家に帰ってきたこともあります。

その度に、若かった私は怒り心頭と同時に、次から次へと襲いかかってくる困難な状況にどんどん心が疲弊していきました。本当に辛かったのは、他の誰でもない「夫」のはずですが、彼のことを思いやる余裕は、当時の私にはとても持てませんでした。

“AYSA’S DAYS”

夫とけんかしても、帰る実家も逃げる場所も、頼れる人もいない。当時20歳そこそこの私の心は、早くも

マリーク AYSA 文恵(まりーく あいさ ふみえ):東京都出身。1999年にガーナ人男性と結婚し、24歳の娘がいる。娘が幼かった頃に、国際結婚やミックスの子どもを育てる想いを綴った日記 "AYSA'S DAYS" を楽天ブログで公開していた。当時の日記 <https://plaza.rakuten.co.jp/aysa2004/>。ガーナへの渡航歴は2回。現在は持病のリウマチ、パニック障害などを抱えながら、20年ぶりにアフリカの地を踏める日を夢見ている。Instagram: @aysa0_922

限界を迎えていました。そして、すべての苦しみの根源である（と、当時は信じて疑わなかった）アフリカを大嫌いになりました。

ストレスから、余裕を持って娘に接することのできない自分、毎日怒ってばかり、泣いてばかりの自分を変えたくて、彼女が4歳になる少し前、楽天ブログで、"AYSA's DAYS" という名の日記を書き始めました。

アフリカ人とのミックスの娘を育てる自分の想いを綴った日記は、少しずつ同じ境遇や国際結婚、恋愛している方々に共感され、気づくと読者も増えていました。コメントも多くいただき、生真面目な私はその一つ一つに真正面から向き合い、毎日夜中まで返信をしていました。当然ながら無理がたたなり、2年で日記は閉鎖せざるを得なくなりました。

でも当時は、その日記や交流が辛い現実を忘れさせてくれた唯一の癒しでした。だから今日まで生きてこられたと言っても過言ではないくらいに、大切な存在でした。今はSNS で何かを綴ると、多かれ少なかれ批判コメントやアンチなどが現れますが、20年前の"AYSA'S DAYS" の日記は、本当に優しく強く、そしてとびっきり温かい方々に愛され、今でも自慢できる宝物の場所となっています。

アフリカとの再会、そしてこれから

私がアフリカとの仲直りを決めた理由は、いくつかあります。

- ・ 中学生からガーナで暮らしていた娘が、高校卒業をきっかけに日本に戻ってきたこと。そして、現地での暮らしが、彼女にとっても多くの良い影響や変化を与えたことを、この目で見て実感することができたこと。
- ・ 転職し、国際協力の事業について学ぶ中で、アフリカについて見たり調べたりする機会が増えたこと。
- ・ 時を同じくして、自分の住む街でガーナについて学ぶ交流会があったこと。
- ・ その交流会をきっかけに、今までずっと避けてきたアフリカ関連のイベントなどについて調べ始めたこと。
- ・ 娘と共にさまざまなアフリカ関連のイベントに参加するようになり、そこで出会えた方々の活動を通し、アフリカへの扉が再び開き始めたこと。

今までずっと避けてきたアフリカ、そしてそれに付随する人々との交流を一から始めるのはとても勇気がいりました。でも、私の思っていた以上に、放たれた扉の向こう側の景色は明るく、そして向こう側にいた人々は、とても寛大で温かかったことを知りました。

昨年末行なわれた、アフリカ日本協議会（AJF）設立30周年特別企画の集いに参加し、活動の歴史などを

知った際、もし私がもう少し早くアフリカと仲直りしていて、まだ娘が小さい時にAJF の存在や活動を知っていたら.....、ミックスキッズの集いなどに参加して、日本での息苦しい気持ちなどを彼女が吐き出せていたのではないかと、同じ想いを抱えて生きる子たちとの輪を作っていたかもしれないのに、と彼女に対し申し訳ない気持ちで一杯になりました。

差別というと、どうしても差別される人間、この場合はアフリカン、そしてアフリカンミックスの子どもたちがフォーカスされますが、その配偶者／親である日本人の私たちもまた、さまざまな思いを抱え、葛藤しています。

いくら何年、何十年、彼らと一緒にいても、当たり前だけれど私は彼らには決してなれないし、彼らの抱える痛みを想像することはできても、同じ痛みを共有することはできません。

長い年月の中で、夫や娘と共にさまざまな差別や偏見と闘ってきました。でも、アフリカンでもミックスでもない私は、彼らの本当の心の痛みを心から理解することはきっとできないのだと思います。

2025年の現在も、当時私が経験してきた困難な状況や苦しい出来事の数々と闘っている方々が、たくさんいらっしゃることは想像に難くありません。決して偉そうなことを言える立場ではありませんが、そんな方々に伝えたいことは、あなたは決して1人ではないということ。そして、そんな方々の周りにいる人に伝えたいことは、どうか彼らの心の声に耳を傾けてほしいということ。

「大丈夫？」と聞かれ、「大丈夫じゃないのよ。助けてほしい」と、素直に言える人は、ほんの一握りです。家族に反対され、頼れる人がいない中での結婚生活、育児は孤独で、出口のないトンネルをずっとさまよい続けているようでした。

そんな中でも、自分のことを1人でも気にかけて、心に留めてくれる人の存在が周りにいるのといないのでは、雲泥の差があると思います。

私のようにアフリカと断絶することになってしまう人が1人でも少なくなるように。自分の選んだ道は決して間違いではなかったと胸を張って言える人が1人でも多くなりますように。

当時、自分の苦しさの中でもがいていた私は、夫が経験していた絶え間ない差別や、娘が小学校生活の中で受けてきた肌の色や髪の毛の毛に関するイジメに対して、全力で向き合うことができていませんでした。

次から次へと襲ってくる事柄に対し、自分自身の心が壊れ、彼らに心から寄り添うことができなかったのです。失われた時間を戻すことはできないけれど、その後悔を決して忘れず、これからゆっくりとアフリカとの関係の再構築に向け、自分のできることを模索しながら、一歩ずつ歩んでいければと思っています。